

地域博物館の限界と再生 -吉田優の地域博物館論と取り組みについて-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学学芸員養成課程 公開日: 2019-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小野, 真嗣 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/20558

地域博物館の限界と再生

—吉田優の地域博物館論と取り組みについて—

小野 真嗣*

はじめに

吉田優は、専修大学では林基門下、明治大学では木村礎門下で日本近世史を学んだのち、千葉県市川市の市川歴史博物館の学芸員として12年間勤務し、明治大学学芸員養成課程の教員を25年間にわたり勤めてきた。

その間、博物館の現場と大学の学芸員養成課程の両方の視点から博物館学、主として地域博物館とそこで勤務する学芸員についての種々の提言を行ってきた⁽¹⁾。近年では、第69回全国大学博物館学講座協議会大会において「地域博物館の限界と再生」という講演を行っている⁽²⁾。この講演は、吉田の長年にわたる博物館学研究の集大成であるといえるが、時間的制約上述べられなかつた点も多くあつた。本来であれば、論考によって全体像を示すべきであるが、残念ながら現在まで公表されていない。

そこで、本稿では論集の趣旨をふまえ、甚だ変則的ではあるが、吉田の未発表の地域博物館論を紹介したうえで、吉田の博物館学における実践的研究に参画してきた筆者の視点からみた吉田の活動を振り返ってみたい。

1. 吉田優の地域博物館論

本章では、吉田の地域博物館論を紹介する。本章は、吉田の未発表原稿を基に、筆者（小野）が吉田から聞き取りを行い、文章の構成と加筆を行ったうえで、吉田の確認と許諾を得て掲載するものである。

今日の地域博物館の限界を語る。博物館は博物館そのものの文脈によって成立する。博物館の問題は、博物館の外側にある現実には依拠しない。それがどうだろうか、現在の博物館の学会の濁流は、博物館の外側にある現実に依拠し、そのことによって妄想的博物館学にしたがう、外来博物館学にしたがう、という博物館の本来の姿から本末転倒したかたちの博物館学が跋扈している。博物館の現場に関わった筆者（吉田）から見ると、博物館が振り回されているようにしか見えない。博物館は博物館でなくなっている。机上の言葉遊びの喧伝の場にされているのではないだろうか。

博物館は平面的なものであれ立体的なものであれ、モノ資料があつてはじめて博物館である。それはアオダイショウの抜け殻であつてもよいのだ。それらをやれ回想学習とか学校教育と心理学的観点とか博物館の中心から遠ざかったところで騒いでいるのが現状である。

博物館とは今も昔も変わらないものであつてモノに語らせればよいのである。モノを知らないで博物館展示も博物館教育も博物館心理学も不可能なのである。

以上の事柄は博物館形而上学の問題である。ここからは博物館形而上下学的な博物館限界論を展開してみよう。

博物館の限界とは博物館ひとつひとつがそれぞれに国公立規模も所属も違うということ

*和洋女子大学人文学部日本文学文化学科 助教

である。そうした千差万別の博物館は、お互に討論できないのである。さらに博物館によっては教育委員会所属もあれば首長部局所属のものもありまちまちなのである。最近はとみに観光部局などに包摂される博物館も増えている。1年後に迫ったオリンピックを意識してのいろいろな試みだろうか。だがしかし要するに博物館は人気がないのである。なぜつまらないと思われているのであろうか。博物館らしきものは紀元前の旧約聖書の時代からあり、今の時代に至るまで消滅せずに残っている不思議な存在である。人間の本性は不变であるとエドワード・ギボンは言ったごとく、博物館も人間の本性に近い存在なのかもしれない。人間の本性が変わらないと同様に、博物館の本性も変わらないのであろう。これも博物館限界論の重要な点の一つといえるであろう。

現在の博物館の濁流は、一見事新しげなことが行われているように見えるが、それは錯覚である。いま行われていることは、『東京国立博物館百年史』⁽³⁾、『国立科学博物館百年史』⁽⁴⁾、『上野動物園百年史』⁽⁵⁾などを読めばすぐにわかることがある。博物館学会で行われているイベント紹介の発表などは、すでに過去に行われているのである。あえて言えば今の博物館学会は、それに今風の味付けを加え、言葉を大和言葉からカタ仮名言葉に言い換えただけのものが、二番煎じ三番煎じで行われ、屋上屋を架す議論が事新しげに行われているだけのことである。

以前、ある大学で行われた博物館学会の終了後の帰り道で、ある参加者が言われたことが今でも耳朶に残っている。こうした博物館学会のやっていることは「何年も手を変え品を変えの同じことの繰り返しですよ、変化しているのは、毎年の参加者の顔ぶれだけですよ」と言わされた。同様なことは博物館関係の書かれたものを読んでいても、必ず途中で思考停止を起こさせるものがほとんどである。

敗戦直後といった特殊な事情でもあったからであろうか、驚きであるが東京国立博物館では国の重要文化財の甲冑などを子どもたちに実際に着用させた体験させるワークショップをおこなっている。国立科学博物館などでも大正時代に通俗教育という目的で、正規の学校に行けなかった多くの優秀な青年たちのために通俗教育の一環として通俗博物館展示をおこなっている。そこで展示ラベルは実際に面白く親切である「このモノについてもつと詳細に調べたい諸君がいたなら裏にある図書館のどういう本の何ページを参考にして勉強を深めてください」という展示解説が行われていた。日本の博物館が明治初期に博物局として博物館と当時の書籍館を一体化したところから構想された町田久成の博物館思想が生きていた典型である。

今年は京都で国際博物館会議が開催される。執行部の委員が、もっともらしい建前を大上段からふりかざし、それに日本の博物館の重鎮たちがもっともらしい博物館論を述べ、国際的セレモニーは終了して、次はどこかの国で代り映えのしないことを新しい造語で粉飾して言い換え、セレモニーは行われてゆくのである。これはこれでグローバリゼーション的な博物館活動として継続されてゆくことを大いに歓迎する。グローバル植民地宗主国や十字軍が破壊した古代ギリシャ・ローマの大理石を、今は大切な博物館コレクションとして彼らの先祖が破壊したモノを大英博物館は展示し現代人はありがたがってみている、人間の本性の構造である。しかし、良くも悪くもイギリスは偉大であり、個人的には尊敬する。

つまりは、現実を見よということである。英國も日本と同じ事情だが、もっと博物館を観よということである。日本の場合、まず文化財保護法下の博物館と博物館法下の博物館とは住み分けをすべきではない。文化財保護法下の国立博物館、美術館や大手の私立美術

館では、コレクションが人を呼ぶのであって、研究調査官やキューラーが人を呼ぶのではないのである。

学芸員は大学で130単位前後の卒業単位を前提として、学芸員有資格者となるのである。そして博物館法にあるように専門職員ではなく専門的職員として、教職課程などと同様に、子どもたちと共に成長してゆくのであり、大人たちと共に成長してゆくのである。これが日本の博物館法下の博物館学芸員(GAKUGEIIN)なのである。地方博物館の学芸員は地域の民具・古文書・土器を中心とし専門的職員としての成長を地域の人々と共に成長してゆくのである。

大学の資格課程で学んだ学芸員は人間的にも研究的にも地域の人々と共に成長してゆく存在なのである。日本の地域博物館の場合は、地域の外に向かってというよりは地域に住む人に自分の地域の独自性を紹介し研究してゆかねばならない。変な専門家モドキになるよりは、地域の人々の要望やリクエストを蒐集し、地域の人々に大切にされるような博物館を作るべきである。たとえば小学校・中学校などとの連携授業の時には、学校が教材として何を必要としているかを聞き取るべきである。

地方博物館には県市区町村立の博物館があるが、県や政令指定都市の博物館学芸員は研究重視とし市区町村の博物館学芸員は教育重視にするとよい。市区町村の地方博物館が展示や研究で調査しきれないものがあったら、県政都市の博物館の学芸員がそれを援助してくれるというシステムにするとよいのではないかだろうか。

そのためには、学芸員の専攻も多様になった方がよい。博物館では実習受け入れの際に考古なら考古学専攻の学生、歴史なら歴史学専攻の学生しか受け入れてくれない場合が多い。ある意味仕方のないことであるが、来館者は専門家ではないのである。専攻外の学芸員の方が来館者の視点に寄り添うこともでき

るのではないか。できれば実習受け入れの何割かは専攻外の学生に門戸を開いてほしい。学芸員業務が多忙であり、実習受け入れが大変であるのは重々承知だがお願いしたいことである。もちろん大学の資格課程の教員もこれには積極的に関与するのは義務である。

現在の博物館の限界をもたらした要因の一つに、筆者(吉田)を含む1970~80年代の博物館バブル期に採用された学芸員の存在がある。この世代の学芸員が退職を迎えた際、後任の学芸員を補充せず、指定管理や非常勤学芸員でまかなく博物館が増加した。これは行政が正規の学芸員を配置する必要がないと判断したためである。財政的な問題があつたにせよ博物館バブル期に大量に採用された学芸員は玉石混交であったことも問題なのだろう。次世代の学芸員にバトンタッチできなかつた点は反省している。

また、博物館の限界要因は学芸員を養成する大学にもある。大学の博物館学、特に資格課程である学芸員養成課程の授業では、現場の学芸員として活動するために必要なものを提供してゆかなければならない。そのためにはどの現場でも対応できる学芸員としての広い視野を持つことができるよう配慮すべきである。教員が自分の研究分野に絡めた内容ばかりの授業を行っていては視野が狭まってしまい百害あって一利なしである。筆者(吉田)らはその点に留意し、同一タイトルの授業でも複数の教員が担当するようにし、学生が選択できるように配慮してきた。

博物館は困難なことは多く存在するが、果てしなく学芸員が成長できる勉強の空間である。専門的職員の道から専門職員へとなつてゆこうではないか。“神は細部に宿る”という言葉があるではないか、日本の八百万の神は地方の博物館を長い目で見つめているではないか。あとは最大の克服課題である博物館の限界とはそもそもいろんなものが混じり合って大きく発展もしないし、つぶれもしな

いというところに限界があるのかもしれない。

2. 吉田による地域博物館再生への試み

本章では、吉田による地域博物館再生への取り組みについて述べていく。

(1) 『市川市史』を読む会

吉田は、昭和 57 年（1982）より市川市の市川歴史博物館学芸員として勤務しているが、その間に吉田が行った博物館での取り組みの代表的なものとして『市川市史』を読む会という講座の実施が挙げられるであろう。

『市川市史』は 1970 年代に全 7 卷 8 冊が刊行されていたが、吉田は第 1 卷から順番に講座受講生とともに全ての『市史』を読んでいった。吉田は歴史博物館の学芸員であり、市川市考古博物館や歴史博物館には考古の学芸員も民俗の学芸員もいたわけであるから、吉田は『市史』の歴史の分野のみ、特に自分の専攻分野である近世史を中心に読んでいけば良いようと思うが、全てを読破したのである。このことは、前章で吉田が言っているように、「大学の資格課程で学んだ学芸員は人間的にも研究的にも地域の人と共に成長してゆく存在なのである」を自ら行ってきたことを示す事例であろう。

また、市川時代から、吉田は「地域住民を博物館に巻き込む」⁽⁶⁾ を実践しており、吉田の地域博物館論の原型はこの頃から構築されつつあったことがうかがえる。

(2) 五霞町史編さん事業

茨城県猿島郡五霞町の町史編さん事業は平成 16 年（2004）度の予備調査を経て、翌平成 17 年（2005）度から開始され、吉田は町史編さん委員及び町史編さん専門委員長を、筆者は調査員及び専門委員を務めた。その成果は平成 21 年度より順次刊行した『町史 五霞の生活史』全 4 卷、およびこの間『五霞叢書』全 3 卷が刊行されている。

専門委員の個々の活動のほか、月 1 回ペー

スでの合宿調査を行い、調査が進められていったが、吉田はこの合宿に学芸員養成課程の受講者を参加させた。自治体史編さん事業に学生を参加させることは從来から行われてきたことであるが、参加する学生は日本史学を専攻する学生が一般的であった。

吉田は、自治体史編さん事業には史料収集・保管、調査が必須であり、それらの事業内容と博物館学芸員の業務は重なる点が多くあることから、学芸員養成課程の受講生を参加させた。また、前章でも指摘しているように、博物館には専攻外の学芸員がいても良いという考え方から、多くの日本史学専攻外の受講者が含まれていた。

すなわち、学芸員を目指す学生を自治体史編さんに関わる機会を設けるということは、学芸員の育成に大変有効的であるという点はもとより、さもすれば難解になりがちな自治体史を学芸員の視点から編さんすることによって、完成した自治体史を利用する住民にとってわかりやすい内容にする狙いもあったとしている。

結果として『町史』には、継続的に合宿に参加した受講者が直接執筆にも関わることとなり、町史の最終巻である『町史 五霞の生活史 地誌』では受講者 11 名が執筆者として名を連ねた。また、筆者も含めて執筆に携わった 11 名中 7 名が博物館学芸員あるいは大学の博物館学教員として博物館に関わることになっており、吉田の狙いが学芸員養成という点では着実に成果を挙げていることがわかる。

(3) 「アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究」

五霞町史編さん専門委員長である吉田が代表研究者となり、平成 24 年（2012）～26 年（2014）度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））「アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究」を取

得し、筆者も研究協力者として参加した。

この科研費研究は、地域住民の博物館に対する要望を収集・分析したうえでの実際の展示活動と、地域住民が自らの関心に応じて地域の事物を研究・学習できる設備を設けることで、住民を博物館へと呼び込むことを意図した研究を実施したものである。

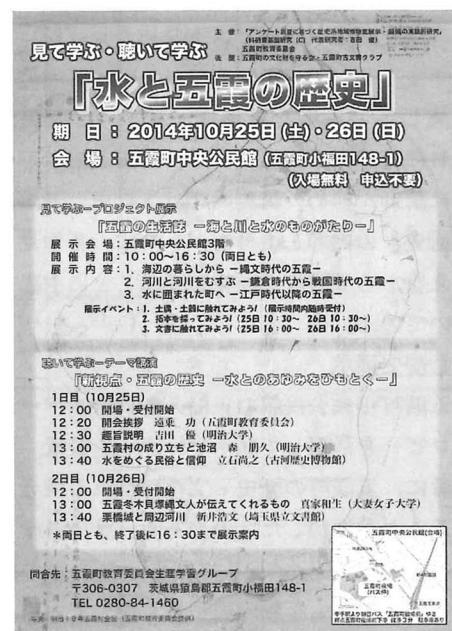
研究内容としては、博物館未設置地域でもある五霞町を研究対象とし、第1段階で五霞町史編さん事業での知見をふまえて五霞町の歴史についての出前講座を小・中学校で行い、小・中学生と地域住民を対象とした博物館に関するアンケート調査を実施し、望まれる博物館展示・設備の分析を行い、第2段階でアンケートに基づいた展示・設備構想の構築を行った。そして第3段階では第2段階で構築した展示・設備構想を実際に公開展示し、同時に歴史講演会を開催した。この間、公開シンポジウムを2回開催し、最終年度には研究成果報告書を刊行した⁽⁷⁾。

詳しい研究成果については、前述の研究成果報告書を参照していただきたいが、吉田がこの研究で意図したものを簡単に述べれば、吉田が従来から主張してきた「地域住民を博物館に巻き込む」ために、従来の歴史系地域博物館が成しえなかつた、地域住民の要望に応じた展示を行う方策を得ることにあった。従来の博物館が設置段階において、展示に地域住民の要望を反映させることは皆無であり、この実際の展示と要望との乖離が、博物館を建物だけの“豪華な物置”としている要因と吉田は考えた。そこで、アンケートによって「地域住民を巻き込み」住民の要望に沿った展示を行うことで、地域住民が訪れやすい博物館像を構築しようとしたのである。

また、伊藤寿朗が地域博物館は市民が自らの表現によって生活を築き、切り開いてゆくことができる力量育成の機会を保証・援助することが役割であると述べているように⁽⁸⁾、地域住民が自主的に研究・学習をするための、

研究・教育拠点としての役割を地域博物館が持つことも、「地域住民を博物館に巻き込む」ためには重要であると考え、地域住民が自らの関心に応じて、地域の事物を研究・学習できる設備を博物館に設けることで、住民を博物館へと呼び込むことを意図した。

この研究は、意図したことがすべて完遂できたとは言い難いことは認めざるをえないが、実際に地域住民と向かい合って研究を行うという点では貴重な成果を挙げており、その後の研究に大いに益しているといえる。



【写真1】展示・講演会ポスター

(4) 五霞町における博物館普及教育活動

五霞町史編さん事業及び「アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究」の成果を生かし、これらを社会に公開・発信することを目的として、地域住民が五霞町の歴史に触れる様々な取り組みを、五霞町教育委員会との連携・協力のもと、現在に至るまで五霞町において継続している。

先述のように、五霞町を対象としてきた事業を通して、五霞町に対して一定の成果を還元できたものと考えているが、これらの事業

は継続・発展させていかなければ、水泡に帰してしまう可能性が高いと考える。本来、このような取り組みは、地域博物館を中心となつて推進されていく、いわゆる地域博物館の普及・教育活動そのものであるが、前述のように五霞町には博物館が未設置であるため、吉田優を中心とした五霞町史編さん事業や科研費研究のメンバーが中心となり行われることとなった。その活動内容の詳細については、すでに拙稿を発表しているため、そちらを参照していただきたいが⁽⁹⁾、主として以下のとおりである。

◎歴史講座（五霞ヒストリーカレッジ）

年度を通して、原則町民あるいは五霞町で就業している者を対象に、月1～2回程度休日に実施する講義である。吉田と筆者が中心に講師を務め、講義内容は『町史 五霞の生活史』の内容・項目をベースに、新知見も交えながら五霞町の歴史を学ぶことに主眼をおいている。

◎歴史展示

五霞町中央公民館の正面入り口のスペースやロビーを活用して展示コーナーを設置。来館者に、五霞町の歴史・文化に触れる機会となることを期待したものである。歴史講座で取り扱ったテーマとリンクさせた内容の展示をし、現在も年数回展示替えをしている。

◎歴史散歩

歴史講座の枠組みの中で、年1～2回実施するフィールドワークである。講座参加者以外にも参加者を募り、普段の講座よりも多くの町民が参加者している。場所は五霞町内外で、歴史講座や『町史』の知見等とリンクさせた内容とし、参加者の興味・関心を惹き付けるようにしている。

以上のように五霞町の歴史を学ぶ歴史講座（五霞ヒストリーカレッジ）を中心として歴史展示・歴史散歩などの各事業をリンクさせて提供する試みは、前述したように五霞町史編さん事業から始まり、文部科学省科学研

費補助金（基盤研究（C））「アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究」を経たものである。

多くの自治体で共通することであるが、自治体史編さん事業によって自治体史を刊行した後、その自治体史を活用することなく事業が終結してしまうことが多くみられる。自治体史刊行後、編さん作業で得られた新たな知見を生かしながら、地域の歴史を住民に伝えることが必要であり、それは各地域の博物館が担当することになるのが一般的であろう。しかし、地域博物館が未設置の地域、あるいは博物館は設置されているが学芸員が不在の博物館では、その活動ができないままになってしまっているのが現状である。

五霞での事業は、博物館未設置地域である五霞町において、博物館がなすべき普及・教育活動を代わりに実施しようとする試みであり、吉田の地域博物館実践の継続したフィールドとなっている。歴史講座において筆者が扱う範囲は、筆者の専門に近い時代だけであるのに対し、吉田の扱う範囲は原始から現代まで幅広く、ここでも『市川市史』を読む会同様に、住民とともに学習するという吉田の考え方方が大変よく出ている。

（5）生涯学習講座「博物館をゆく」

明治大学の生涯学習講座リバティアカデミーにおける1講座として「博物館をゆく」を平成28年（2016）度より開講している。コンセプトは国内外のメジャーな博物館から地域博物館まで、様々な種類の博物館を紹介したいというものであり、各回に主軸となる博物館をテーマとして設定し、その博物館や関連する人物や博物館について講義を行っている。半年間で全8回の講座であるが、受講者が継続受講できるよう、テーマはこれまで重複しないよう考慮してきている。

当初は、吉田と筆者の2人で始め、各回の主題となる博物館選定、報告内容の決定、レ

ジュメ・資料の作成までを吉田と筆者で行い、講義中は吉田が主解説、筆者がアシスタントとする役割分担を行った。平成 29 年 (2017) 以降は複数講師による歴史以外の講義も行っている。8 回中 1 ~ 2 回のフィールドワークを行い、学芸員の解説を受けながら実際に博物館を見学できる機会を設けている。



【写真 2】「博物館をゆく」パンフレット

博物館普及教育活動を目的として開始した本講座の当初の講座コンセプトは、普段ある程度博物館を利用している層を対象とした「もっと博物館を楽しむ」といった内容を想定しており、博物館の展示については紹介することではなく、一般的には博物館の表面に登場しない背景や関連人物の紹介など、多少マニアックな博物館中級者以上を対象としての講座を開展していた。しかし、講座中の受講者との対話より、受講者の本当に求めているものに気付かされることになり、講座の前半部分において各博物館へのアクセスから展示内容の特色にいたるまでの解説を行い、後半部分に専門的な事項やマニアックな事項を取り扱う、という形に内容を変更した。

本講座では、半年間の講座終了後にアンケートを実施しているが、そのアンケートからは、一般の人が博物館をどう捉えているかについて興味深い結果が得られている。そのアンケート分析については、すでに拙稿にて分析しているため、そちらを参照していただきたい⁽¹⁰⁾。吉田は、博物館に普段行かない

人のアンケートは博物館に訪れた人のアンケートに比べて一般市民の博物館に対する意見であり、安くない受講料を払って受けている講座のアンケートの回答はシビアなものであり、その価値は非常に大きいとしている。

筆者らは、人々が博物館を訪れるようになる最初の段階には、人々が「博物館を楽しむ」という気持ちになってもらうことが重要だと考えている。多くのスポーツなどが初めて体験する人に、まずそのスポーツの楽しさを知ってもらうことから始めるように、博物館も「博物館で学ぶ」前に、まず「博物館を楽しむ」ことを知ってもらうことが重要ではないだろうか。そのためには、まず博物館に対するビジターセンターのようなものが必要であろう。

博物館が、自身の博物館を紹介する試みは各地で行われているが、今回の講座のような特定の博物館ではなく、日本中の博物館を対象として講義する試みは、他で行われているようで行われていないことである。このようなビジターセンターの役割を果たす取り組みは、日本の博物館全体にとって有意義であるといえるのではないだろうか。吉田のこの講座の取り組みは、博物館に来る来館者を待つのではなく、博物館の外で博物館に「住民を巻きこむ」行動であり、吉田の博物館活動への取り組みの特徴がよく表れているといえる。

(6)「大学と地域社会の連携による生涯学習拠点としての地域博物館再生に関する実践的研究」

吉田が代表研究者となり、平成 28 年 (2016) ~ 30 年 (2018) 度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））「大学と地域社会の連携による生涯学習拠点としての地域博物館再生に関する実践的研究」を取得し、「豪華な物置」と化した地域博物館を大学の学芸員養成課程と地域社会の連携・協力に

よって地域の生涯学習拠点として活性化させることを目的とした研究を実施している。筆者も研究協力者（平成 28～29 年度）・分担研究者（平成 30 年度）として参加している。

吉田は日頃より、地域住民が主体となって博物館運営に携わることの必要性を痛感しており、本研究では五霞町の隣接自治体である茨城県猿島郡境町を研究対象とし、「地域住民を巻き込んだ」地域博物館の活性化を目指したものである。

この研究の特徴は、大学の学芸員養成課程の教員・受講生が現地の教育委員会・地域社会と連携し、活動不能に陥っている地域博物館を再生し、生涯学習拠点として継続的に活用できるよう環境作りを行うことであった。

予算不足等で学芸員不在の地域博物館は全国に多数存在する。一方で、学芸員養成課程受講生は、課程中に実際の博物館学芸員業務を体験できる機会は博物館実習など限られた時間でしかない。そのため、この活動は総合的知見を有し、地域住民と向き合うことできる博物館学芸員の育成に極めて有効的に作用すると考えた。また、学芸員不在の博物館を有す地域および地域住民と学芸員養成課程の受講生双方にとって有益な活動を実践するものであり、今後の地域博物館と大学の学芸員養成課程の連携・協力のモデルケースとなることが期待できると考えた。

具体的には、学芸員養成課程受講生とともに 3 泊 4 日程度の合宿を計 5 回行い、境町歴史民俗資料館に保管される民具資料をすべて再調査・記録し、最終年度には資料館全体の展示リニューアルを行うことができた⁽¹¹⁾。

また、地域住民のボランティア団体「下総さかい河岸の会」を設立し、3 年間で約 30 回の学習会を行った。これは科研の終了後、将来的にはこのボランティア団体すなわち地域住民自身が展示制作や展示解説等をも手掛け、地域住民が望む形の資料館運営を地域住民自身の手で行えるよう、サポートしていくことを目

指している。学芸員不在の地域博物館は、地域住民が主体となり運営していくことで真の地域生涯学習の拠点となり得ると考える。

境町歴史民俗資料館 リニューアル



【写真 3】境町歴史民俗資料館展示リニューアルポスター

おわりに

吉田優の地域博物館論とその取り組みは、吉田自身が現場の学芸員と大学の学芸員養成課程の両方を経験するなかで構築されていったものといえる。吉田の地域博物館における「住民を博物館に巻き込む」という考え方は、現場の学芸員としての経験なしには考えられず、学芸員を養成する過程で実際の現場を体験することによって、地域と向き合う学芸員を養成することができるとする考えは、長年大学の学芸員養成課程の教員を勤めてきた吉田ゆえの結論といえるであろう。

一方で、吉田は大学での体系的な博物館学の習得も重視しており、理論と実践の両立が必要であるとしている。しかし、吉田は日本における体系的な博物館学の確立については疑義を呈している。

今後は、自身の経験を活かした吉田博物館

学の確立を筆者は望むものである。

【付記】

矢島國男先生・吉田優先生には学部生以来、博物館に関する多くのことをご教授いただきました。この場をお借りして、感謝申し上げます。

註

- (1) 代表的なものとして「歴史系地方博物館の歴史研究法—その基礎研究—」(『明治大学人文科学研究所紀要』第 47 冊, 2002 年), 「全国地域博物館における展示理念の研究」(『明治大学人文科学研究所紀要』第 56 冊, 2005 年), 「歴史系地方博物館の自立」(『全国大学博物館学講座協議会研究紀要』第 10 号, 2008 年)。
- (2) 第 69 回全国大学博物館学講座協議会大会 2017 年 6 月 24 日 於明治大学。
- (3) 東京国立博物館編『東京国立博物館百年史』(東京国立博物館, 1973 年)。
- (4) 国立科学博物館編『国立科学博物館百年史』(国立科学博物館, 1977 年)。

- (5) 東京都恩賜上野動物園編『上野動物園百年史』(東京都恩賜上野動物園, 1982 年)。
- (6) 吉田優「地域博物館の展示調査研究」(『明治大学学芸員養成課程紀要』第 20 号, 2009 年)。
- (7) 『アンケート調査に基づく歴史系地域博物館展示・設備の実践的研究 平成 24 年度～平成 26 年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C））研究報告書』吉田優研究室, 2015 年)。
- (8) 伊藤寿朗『市民のなかの博物館』(吉川弘文館, 1993 年)。
- (9) 拙稿「博物館未設置地域における博物館普及教育活動の実践と成果」(『明治大学学芸員養成課程紀要』第 28 号, 2017 年)。論文中では事業開始の 2016 年度の活動についてのみ記述されているが, 2018 年度まで継続しており, 2019 年度以降も継続する予定である。
- (10) 吉田優・小野真嗣「大学の生涯学習講座における博物館普及教育活動の実践研究」(『明治大学学芸員養成課程紀要』第 29 号, 2018 年)。
- (11) 詳細については今年度末に刊行予定の研究報告書にまとめる予定である。

The Local Museums at the Limits and its Restoration — A Theory and Activities for that of Yoshida Masaru

ONO Shinji

Yoshida is a historian specialized in early modern of Japan. He had engaged as a Gakugei-in at the Ichikawa History Museum for 13 years and after he taught museology at Meiji University for 25 years. Through these, he promoted and proposed various museum activities in and for local museums.

In this paper, I would present his works and thought known through practical museum works with him.